

三重県内「子ども食堂」の実態調査結果について

三重県健康福祉部子ども・家庭局
子育て支援課

■調査の概要

○調査目的

ここ数年、ボランティア活動や子どもをめぐる問題に強い関心のある方々が中心となって、放課後から保護者が帰宅するまでの間や休日に保護者のいない間などに、食事や学習などを行いながら一緒に過ごす“居場所”づくり活動が全国に広まっています。特に孤食など家庭的な環境で食事をする機会の少ない子どもや貧困等で困難を抱える子どもに対して、地域の社会資源（公民館、児童館等）を活用して、食事を中心とした居場所の提供を行う「子ども食堂」の取組は、居場所づくり活動の中核として社会的な注目を集めています。

県では、近年地域にひろがりつつあるこの「子ども食堂」について、県内の運営や活動状況について実態把握を行い、県における今後の取組みを検討するための基礎資料にするとともに、既に「子ども食堂」に取り組んでいる方や「子ども食堂」への支援を考える方への情報提供を行うため本調査を実施しました。

○調査対象

三重県内で、「子ども食堂」やそれに類似する活動を行う団体 26 カ所(注)

○調査期間

平成29年8月14日～平成29年10月末

○調査方法

実態調査票の郵送による書面調査と一部の子ども食堂への現地見学

○調査項目

活動場所、活動目的、活動内容、運営経費、食材の調達先など

○回答数

16団体（回答率：61.5%）

※うち1団体は、公表を希望しないため、集計対象数は15団体

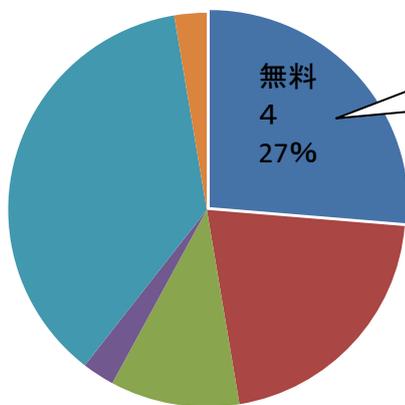
注) 調査対象26カ所は、市町からの情報提供、報道資料、HP等で確認した団体の数であるため、既に活動停止となっているものなど対象外のものが含まれていた可能性があります。また、県が内容を把握していないだけで、これ以外にも活動を続けている「子ども食堂」が存在する可能性があります。このため、今回の調査は、県内すべての「子ども食堂」を反映したものではないことをご了解願います。

◆子ども食堂とは（県の考え方）

有識者等においても明確な定義付けはないようですが、名付け親とされる「気まぐれ八百屋だんだん」近藤博子さん（東京都在住）の定義である「こどもが一人でも安心して来られる無料または定額の食堂」を基本に、子どもの家庭環境や特定の世代にとらわれない幅広い利用者層を対象としているもの、不定期開催（年数回）のものなども、子ども食堂に含めて良いと考えています。

近年は、食の支援だけでなく、地域共生型の子どもの居場所として、①子ども達に食事を提供し、子ども達を見守りながら、必要に応じて支援機関につなぐ。②家庭・学校に続く第三の居場所として、信頼できる大人（地域社会）との出会いと交流の場とする。③自主学習や子ども同士の遊び、体験活動等、大人（地域社会）との交流による社会性（多様な人間関係）を取得するなど、多様な役割を担っています。

《凡例：図の見方》

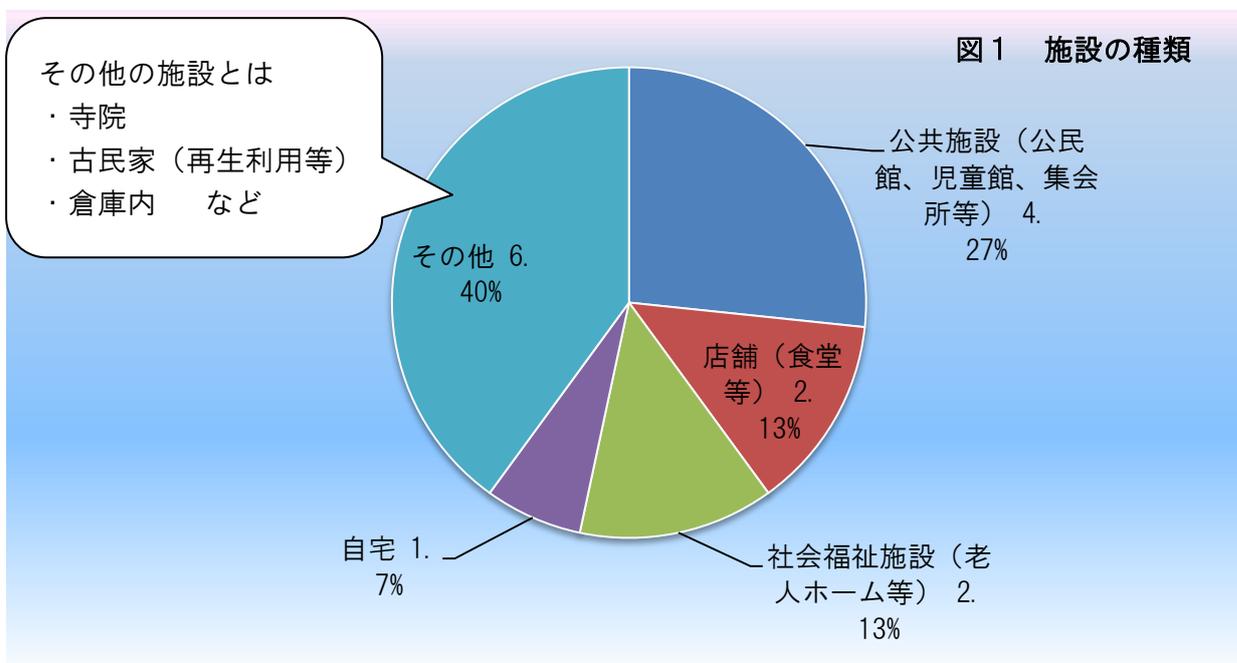


回答項目、件数、割合（%）の順に記載しています。

1. 活動場所について

◆施設の種類

活動場所は、公共施設を利用するところが最も多いものの、自己の所有する店舗や社会福祉施設など、その活動場所はさまざまです。なお、どのような場所で活動を始めるかによって、その後の活動内容(回数や規模等)に違いが生じる場合もあります。

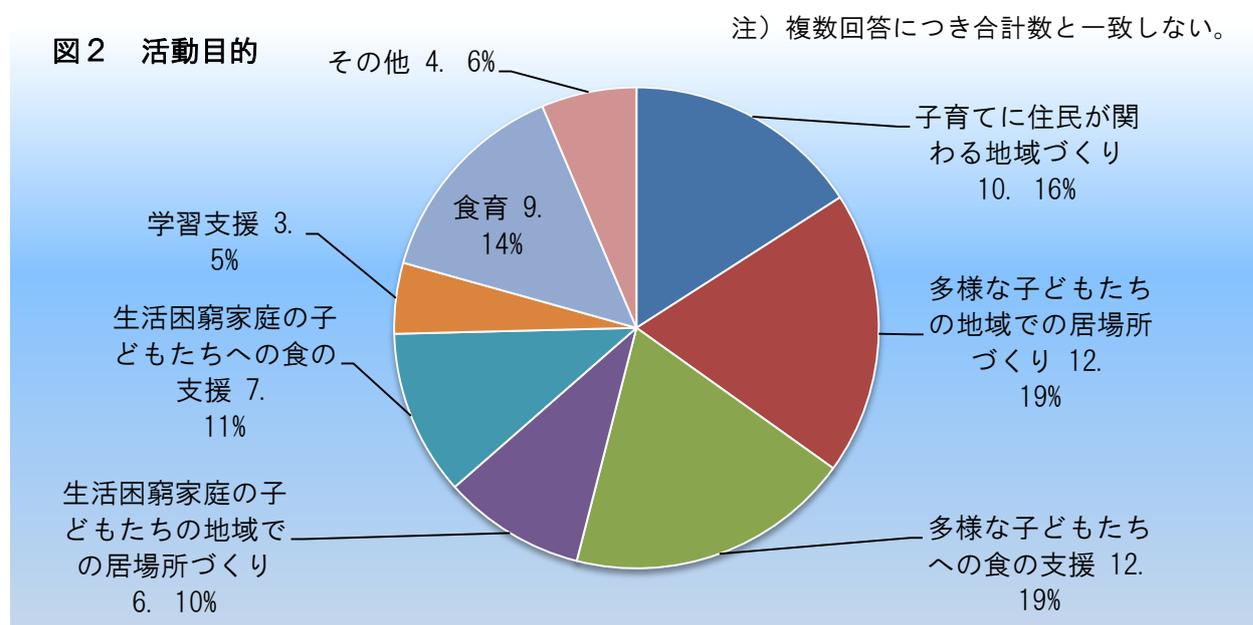


◆活動場所の情報公開

一般に公開している	13	87%
関係者や利用者だけに連絡	2	13%
その他	0	0

殆どの「子ども食堂」が活動場所は一般に公開していますが、関係者や利用者だけに連絡しているところでも、部外者の利用制限はありません。

2. 活動目的について



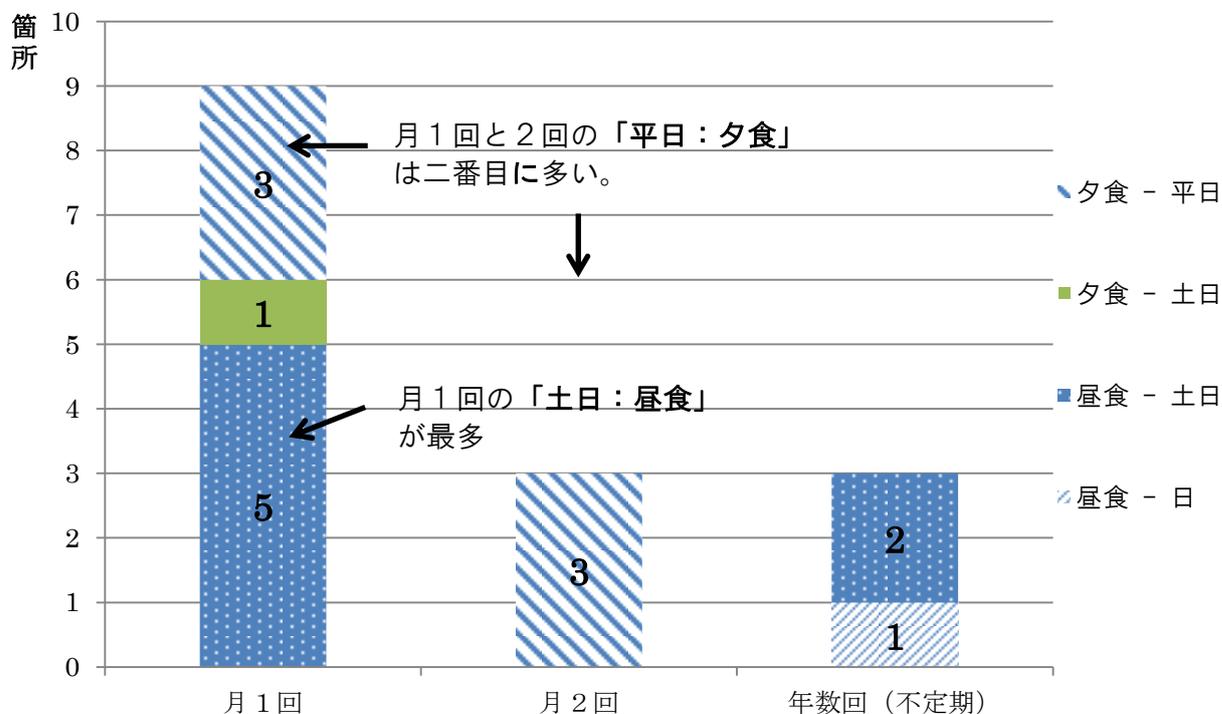
活動の目的は多岐にわたっており、どの「子ども食堂」も一つだけでなく二つ以上の目的をもって活動しています。なお、図中にある「多様な子どもたち」とは、共働き家庭やひとり親家庭及び生活困窮家庭など家庭の事情で、孤食や不規則な生活を送るなどしている子どものことをいいます。

3. 活動内容について

◆開催回数と曜日など

子ども達の利用のしやすさを考え、平日では夕食、土日では昼食実施が多くなっています。下表のとおり、月1回の「土日：昼食」が最も多く、次いで多いのは、月1回と月2回の「平日：夕食」が多くなっています。なお、年数回と回答のあった団体の中には、子ども食堂とは別に、学童保育所の食事支援（おやつも含む）を週5回実施している箇所もありました。

図3 開催回数と曜日など



◆利用対象者について

最も多いのは、子どもに限定せず誰でも利用できる「子ども食堂」でした。名前に“子ども”を表記しないところもあります。

なお、生活困窮世帯の子どものみ（保護者同伴も可）を対象とする「子ども食堂」はありません

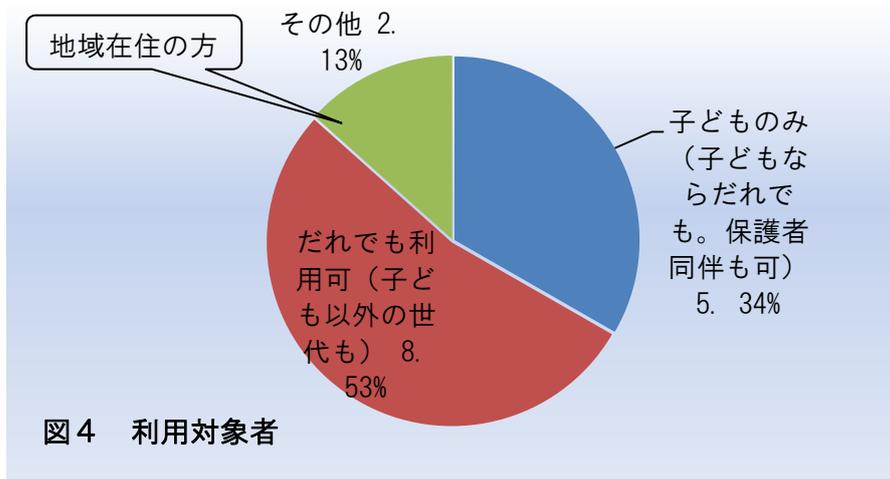
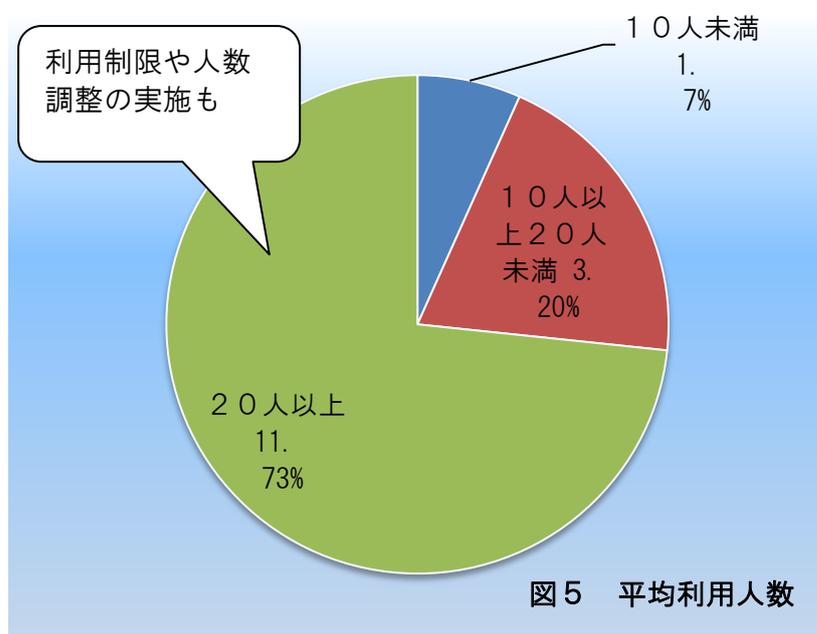


図4 利用対象者

でした。子どもの貧困対策のみにこだわることのない、さまざまな人々の地域交流の場としての役割を担う反面、生活困窮世帯に限定して運営することの難しさを指摘する声もあります。

◆平均利用人数



一回あたりの子どもの利用人数は、20人以上と回答したところが最も多く、1回に60人以上の子どもが利用する日もある「子ども食堂」もあります。そのため、やむを得ず、参加者の利用制限や入場調整を行うところもありました。また、調査時点では、「子ども食堂」を始めたばかりのため、利用者がまだいないところもありました。(10人未満に分類)

図5 平均利用人数

4. 運営経費について

◆財源の種類

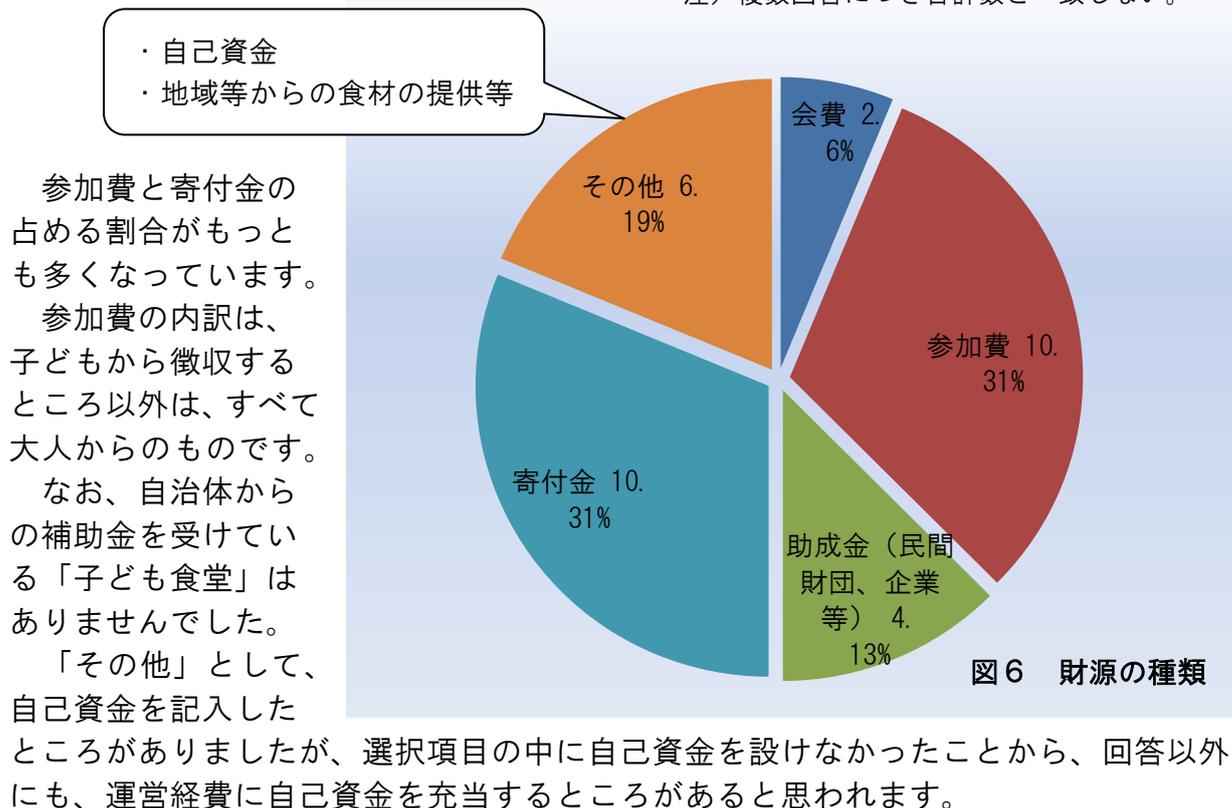
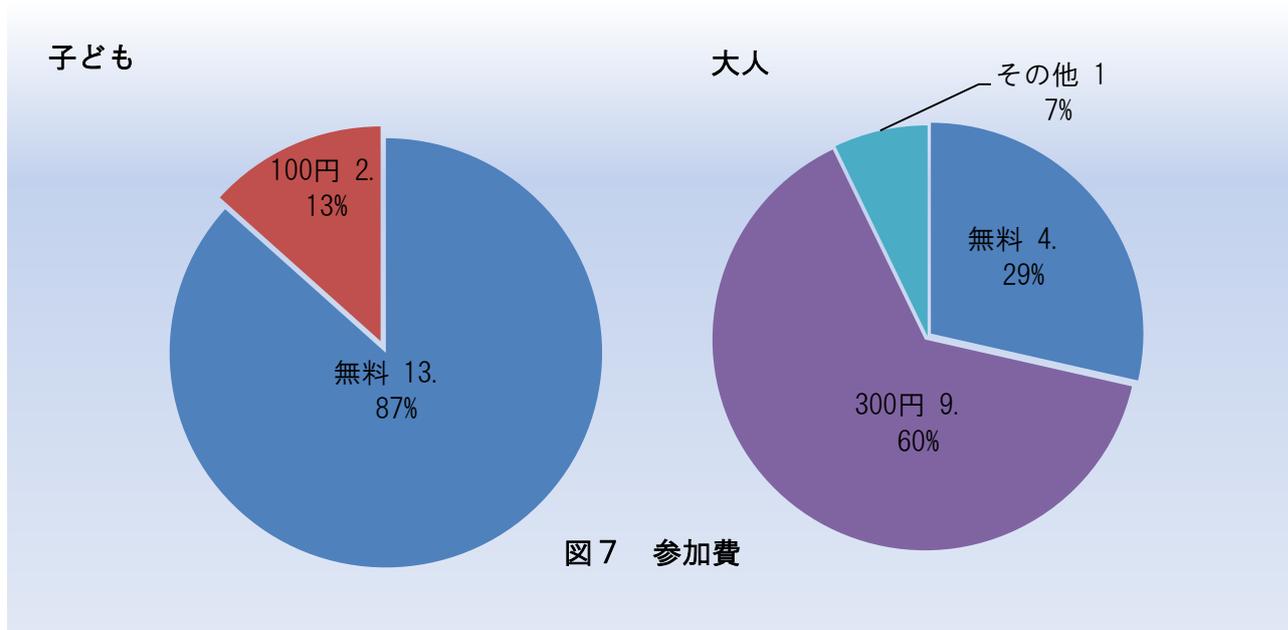


図6 財源の種類

注) 食材の提供は、厳密には財源（金銭の出所）に分類できないが、現物給付ということから、財源に含めた。

◆参加費

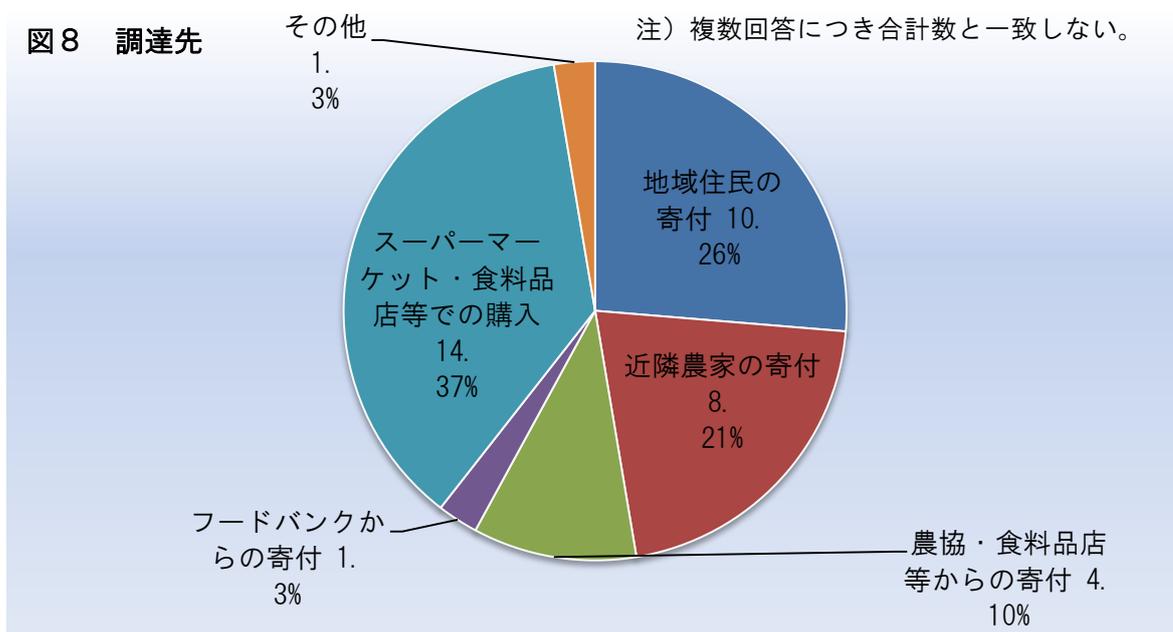
子どもの参加費は、殆どが無料です。有料なところでも、子どもの達の実状に応じて徴収方法を工夫しています。大人の参加費が無料なところでも、寄付などを募るところもあります。



5. 食材の調達先について

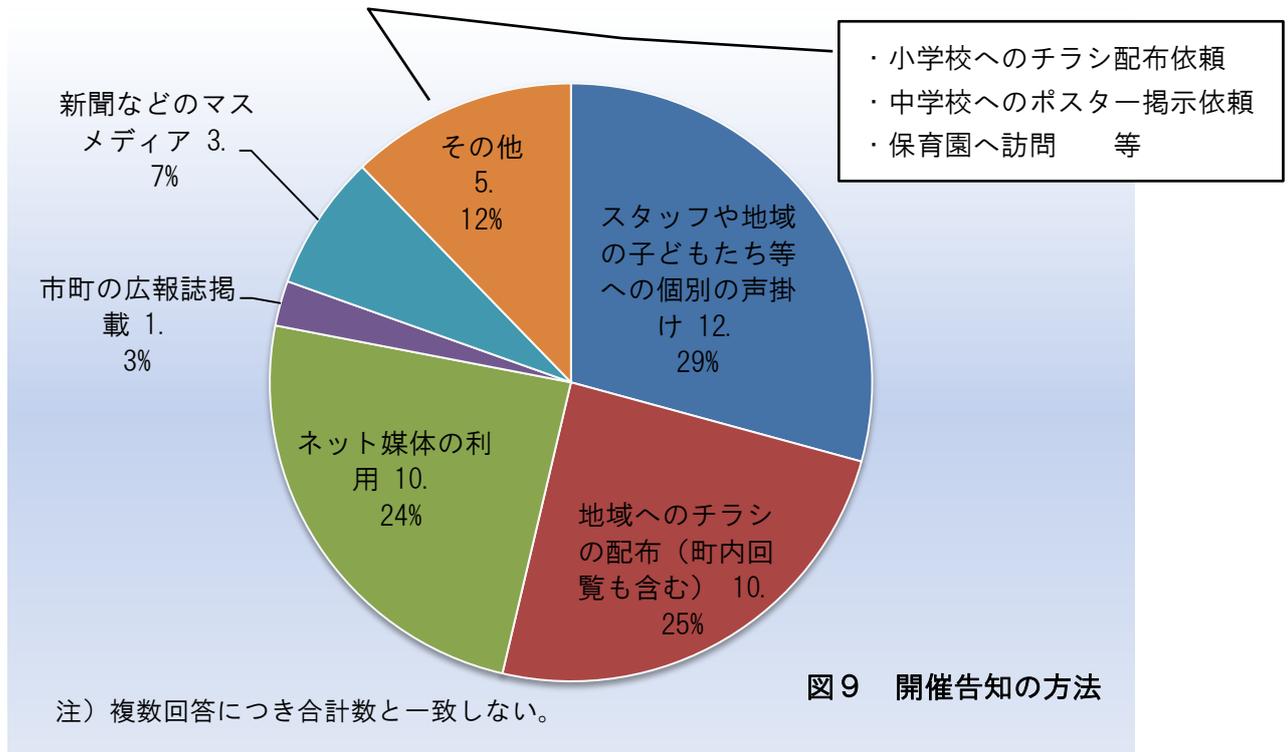
食材は、地域の方々や近隣農家の方及び農協・食料品店等からの寄付と、スーパーマーケットや店舗で自ら購入する方法により殆どが賄われています。

なお、フードバンクからの調達は少数にとどまっています。



6. 広報について

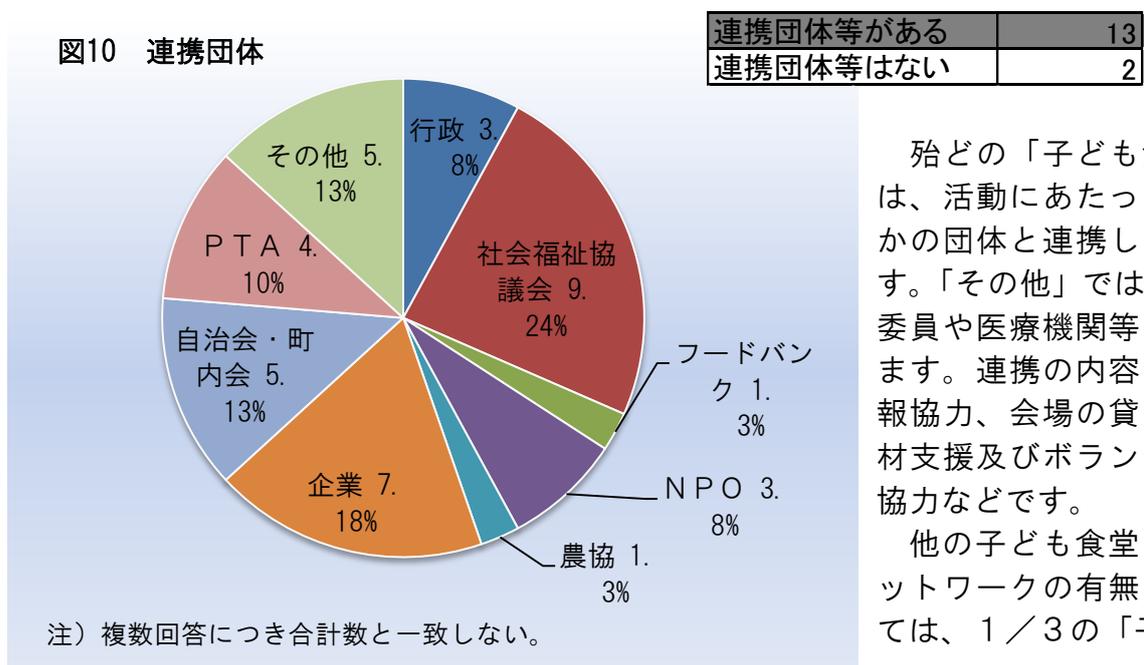
◆開催告知の方法（子どもたちをどのように集めているか）



スタッフや地域の子どもたちへの声掛けが最も多く、ネット媒体の利用割合も高くなっています。チラシやポスターを作成し、地域や小中学校等を訪問し配布を依頼するなど、地道に取り組む姿がうかがえます。

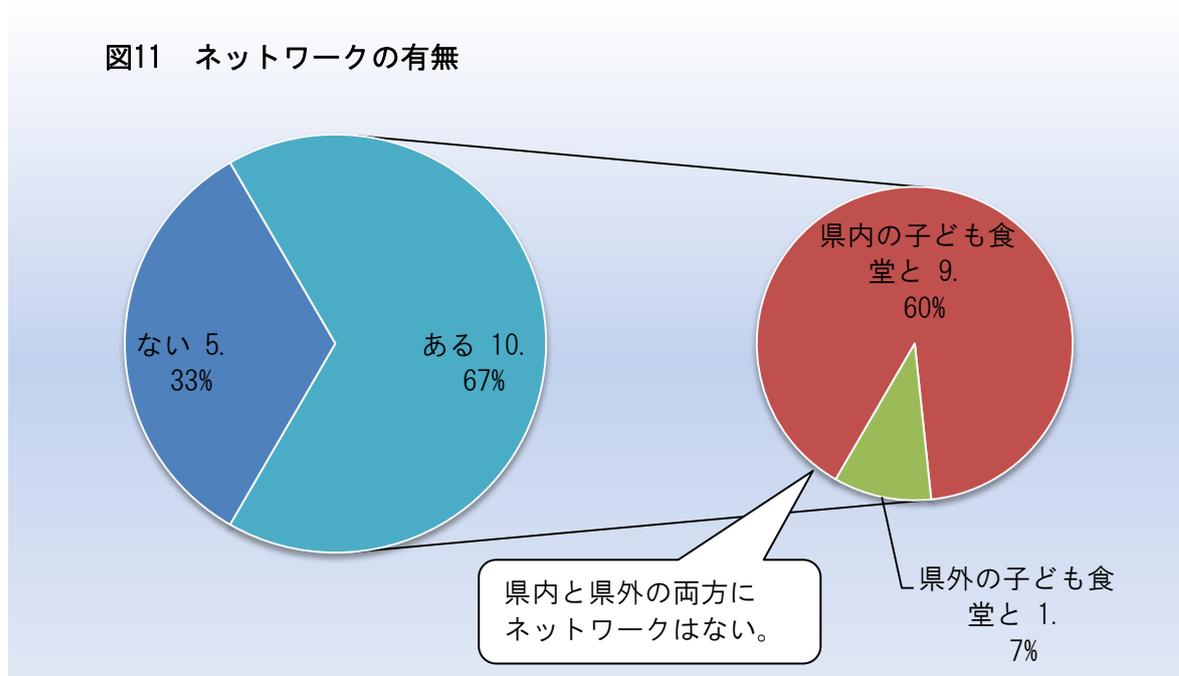
7. 連携団体とネットワークについて

◆活動にあたって連携している団体等



食堂」でネットワークを持っていませんでした。(ネット等で分かるから不要との意見もありました。)なお、ネットワークの範囲は県内と県外のいずれかであり、両方にネットワークを持つところはありませんでした。

◆他の子ども食堂とのネットワーク



8. その他（記述回答）

注) 記載内容は、できるだけ原本のとおりとしましたが、特定の個人や団体に関する記述については、表現を変えてあります。

□はじめたキッカケ

- ・ 子どもの貧困の学習会に参加したことが契機となり、同じ地区の有志が集まり「子ども食堂」を行うことになった。
- ・ 学校給食以外に食事をする機会が少ない生活困窮家庭の子どもや、両親が共働きのため、孤食となっている子どものことを知ったとき。
- ・ 地域づくりの構想の一環として、皆が支え合い多世代が交流できる場所を作り、子育て支援や高齢者支援を始めたが、その一環で「子ども食堂」を始めた。
- ・ 孤食だった我が子が楽しんでくれたらとの思いで始めたが、現在の子どもの貧困に関するさまざまな問題が見えてきた。経済格差と子どもの学力、子どもの経験の貧困、夏休み明けにやめてしまう子ども等、私達にできる課題から積極的に参画したいと思っている。
- ・ 先進県での実践事例をマスコミで知ったこと。
- ・ 食べ残しなどの抑制による食品ロス削減の問題をうけて。
- ・ 貧困という課題を抱えている子どもや、たまには大勢で賑やかに食べたいという孤食の子ども達が、気軽に集まれる場所を提供したいという思いから。なお、「子ども食堂」ということで、当初は“貧困”というイメージが強く、保護者から反対意見が出るのではないかと心配でしたが、子どもたちと保護者及び地域住民が一緒に楽しく

食卓を囲み時間を共有しながら絆を深めることを前面にPRしたところ、反対意見は出ませんでした。

- ・ 自分自身が貧困の当事者として長く苦しんできたが、人との関係性で生きる力を取り戻すことに気づき、「つながりあう場所」として団体を設立し活動を始めた。その中で、食を通した“つながり”を作ろうと思い「子ども食堂」を始めた。
- ・ インターネットで子どもの貧困問題を知り、先進県での活動を参考に始めた。
- ・ 子どもの貧困問題の緊急性と深刻さに気づいたから。
- ・ 自分自身が幼少時に貧困であったが、地域や近所の人に助けてもらった思いが強く、地域にその恩返しをしたかったから。また、多世代の交流が少ないためか、子どもたちのコミュニケーション能力不足に不安を持ったため。
- ・ 学習支援に関わる中で、学習支援だけでなく、生活支援や心の交流支援も必要だと思ったから。
- ・ 高齢者の集いの場づくりと次世代の担い手発掘を目的に、とにかく自分たちでやってみようと思った。

□実施するうえで大切にしていること

- ・ 毎回のメニューは決まっているので、食後のお楽しみメニューとして、交流スペースで遊んだり感想を書いてもらうなど、食事だけでなく、地域の交流や居場所づくりとして実施している。
- ・ 子どもの食育を行うための食べ物の安全衛生、子どもと地域住民の交流及び子ども同士がふれあいながらの食育
- ・ 来てくれる方のことを第一に考え、子どもたちにおいしいご飯を食べて帰ってもらうことを大切にしている。また、貧困家庭の子どもだけでなく、地域の方すべてを対象にしているので、さまざまな親子や子どもたちのグループに来てもらうことにしている。
- ・ 季節の野菜を使い、食の大切さを子どもたちへ伝えること。また、美味しくておいしそうな食事を毎回提供し、忙しい親のテンションもあがり喜んでもらえるよう心がけている。
- ・ たくさんの人が私たちの「子ども食堂」を応援してくれているので、その方達の想いをしっかりと支援対象者へつなげることを意識しています。
- ・ 地域への理解と協力を得ることを心がけている。
- ・ 食の安全に特に気をつかいながら、子どもたちの喜びそうなメニューと食事マナーや挨拶習慣など生活面への指導もしていきたい。また、活動を通じて“いじめ”の芽をつめればと考えている。
- ・ 提供する食品の安全性に気をつける。また、貧困の子どもだけを対象とし集めないこと。
- ・ アレルギー対策（メニューに使用材料名の周知等）を行うこと。
- ・ 参加者が安全安心に過ごせるようにすること。食べるだけではなく、さまざまな体験をし、人と関わりあっていけるようにすること。
- ・ 多様な子どもたちと親たちのデリケートな気持ちに寄り添い、押し付けにならないようにすること。
- ・ 食事の提供を主として、子どもたちや母親たちの交流の場づくりとなるように配慮。
- ・ 一か所に多数を集めるのではなく、少人数の開催場所を増やしていく取組を主としている。
- ・ 子どもにとっては、美味しく楽しく、親にとっては、ほっと安心できる雰囲気の間

所づくり、そして安全な食の提供。

- ・ 地域の人々に理解し知ってもらうこと。なお、貧困の子どもにアプローチしていきたくと考えますが、貧困の子どもが学校や地域でつらい思いをしないよう、あえて貧困という言葉を出さずに誰でも参加可能としている。
- ・ ボランティアスタッフも来場者も、心地よく笑顔で楽しくすごせること。
- ・ 参加者が食材と知恵や負担をもちよることで食堂を運営している。スタッフと参加者といった明確な線引きはあえて行わず、皆が参加者として楽しめるよう、スタッフ側の負担軽減にも配慮しながら運営している。

□はじめて良かったと思うこと

- ・ 地域で暮らす老若男女が月1回集い、食事を通して笑顔を見せてくれること。また、新しく参加する子どもや大人たちが、子ども食堂を通して顔見知りとなり、交流するキッカケづくりの場となっていることがとても良かったと思っている。
- ・ 子ども同士が話しをしながら笑顔で食べている姿を見るとき。また、地域住民との交流やボランティアスタッフと子どもの交流ができること。
- ・ 地域の中で知り合いの少なかった母親が、「子ども食堂」に来たことがキッカケで、母親同士が友達となって楽しそうに帰られる様子を見たとき。また、貧困やひとり親家庭でなくても、親御さんの帰りが遅い家庭の子どもや、父親の帰宅が遅くいつも母子で食事をしているという方が、ここに来て大勢で賑やかに食べられて嬉しいと言ってくれたとき。
- ・ 毎回楽しみに来てくれる子どもたちの笑顔や、月に一度の「子ども食堂」でいろいろな話や相談をしたりすることで、ストレスの緩和につながっている母親たちを見ると、この活動を続けていて良かったと思います。
- ・ 参加者が回を追うごとに増え、さまざまな形で協力を申し出てくれる方々が多くなった。
- ・ 「子ども食堂」の場を通して、同じ志を持つ大人同士が出会えたと、手を取り合って喜びが次々と広がっている現状を見た時。また、予想以上に活動への反響が大きく、毎回成し遂げた後の打ち上げでは、皆の顔が生き生きと輝き、思い思いの感想を述べ合うなど、スタッフ同士の絆が一層固まった事。
- ・ 子どもたちが、嬉しそうに「次はいつ？」と待ち遠しい様子で帰る事。
- ・ 目的を持って活動することによって組織が維持されること。
- ・ 子どもたちの楽しそうな笑顔が見られること。また、世代間の交流等、地域のつながりが少しずつ深まってきたこと。
- ・ 子どもの育ちを思い、自分にも何かできるのではないかと寄付やボランティアをしてくれる方が予想以上にいたこと。
- ・ 他の学区や市町村からも参加してくれる方がいて、新しい“つながり”が生まれてきたこと。
- ・ 毎月楽しみにしてくれる子どもたちの笑顔が見られること。
- ・ 少人数家庭の子どもたちは、同年齢層の子どもと一緒に食べることの楽しさを、お母さんたちは、子育ての悩みを話し合う場となっている。将来は、高齢者も含めた「三代の食堂」を目指していきたいと考えている。
- ・ 活動を始めるにあたり、単なる食の提供を行うだけでなく、いろいろな相談がワンストップサービスでできる Social Community Space としての機能をイメージした。そのため、声掛けしたスタッフメンバーには、行政、社協職員、民生委員・主任児童委員、訪問看護師、助産婦、MSW（医療ソーシャルワーカー）など、多職種連携を

念頭に多様なスキルの方々にお集まりいただいた。これらのメンバーが賛同し協同していくことができたのは、「子ども食堂」というインパクトのあるコンセプトのおかげだと思っている。そして、さらに多くの同志を掘り起こし巻き込みつつある。

- ・ 人と人との関わりが薄く冷たくなると近年言われますが、まだまだ日本の若者も温もりある心を持っていることがわかったことです。20代の若者もボランティアに来てくれます。また、母親同士のつながりが生まれたことや外国籍の母親と日本の母親の交流も生まれました。
- ・ さまざまな人を対象として活動する中で、子どもが野菜（地域の無農薬野菜）を食べて美味しいと言ってくれることや、安心して外食できる場を提供し、救われている保護者がいること。また、ボランティア同士のつながりも広がった。
- ・ 地域の中での特定の住民ではあるが、活動が定着してきた感があり、参加の有無を問わず、食材の提供やおやつの差し入れなどが出てきたこと。

□活動の中で印象に残ったエピソード

- ・ 「美味しかった。また、次回も来るから」と帰りがけに声掛けしてくれることで、それまでの疲れも吹き飛ばし、何よりも子どもたちから勇気をいただいている。
- ・ 子どもたちが、食べ終わった食器類を自ら進んで後片付けしてくれた事。また、「ありがとう」「美味しかった」と口々に言われた事。
- ・ 保護者の方が、「家では食べないのにたくさん食べた。」とか、「家ではダラダラ食べるけれど、今日は集中して食べた。」など、家庭とは違う一面を子どもたちが見せてくれたと報告していただく。
- ・ 離婚後子どもに会えない父親から、食材の寄付をいただいた。我が子に会えないけれど、この子ども食堂があるから、（我が子の好物を）食べさせることができると喜ばれた。
- ・ 子どもたちがどんどんお手伝いをしてくれるようになり、年上の子が、小さい子に絵本を読んであげたり、お世話をしてくれるようになった。
- ・ ボランティアの増加とともに、地域の年間行事として定着してきたように思う。近所のひとり暮らしのお年寄りが訪ねてくれるようになった。
- ・ 「子ども食堂」を始めた月が七夕月であったので、短冊に願い事を書いて笹に取り付けました。その中で、“かぞくが なかよくなりますように”とひらがなで書いてある短冊を見つけ、おそらく夫婦仲が悪く、幼いながらも心を痛めているのだと胸がしめつけられる思いがしました。離婚が急増している昨今、気持ちの困窮を何とかしたいと思っています。
- ・ 市長との食事も、子どもたちはものおじしないで笑顔で楽しく食事しおしゃべりしているのが印象的でした。また、大きな子が小さな子を助けてあげる（消毒スプレーをうまく出せない低学年の子を見ていた近くの高学年の子がポンプを押して出してあげていた。）姿が印象的でした。
- ・ 参加している小学生の先生が「子ども食堂」に初めて来場された時、いつもボランティアをしている大学生が先生に対し、「いつも子どもたちがお世話になっています。」と挨拶してくれたこと。ボランティア大学生と子どもたちの関係が出来ていることを実感しました。
- ・ 赤ちゃんをはじめ、小さなお子さんを3人連れてお母さんが、赤ちゃんはスタッフが抱っこし、子どもたちは大勢の中で遊んでいた時に、「こんなにゆっくり一人でご飯を食べるのはホント久し振り」と喜んでみえる姿を見て、ワンオペで育児をするお母さんの大変さを痛感した。

- ・ 子どもたちが初めて包丁を持ち楽しいといってくれました。また、少し大きい子どもたちは、小さな子どもたちの面倒をみてくれますし、進んで食事の用意も手伝ってくれます。
- ・ 参加した保護者の方からレシピを問われることが多く、食べてみて「自分も作ってみよう」という意欲のきっかけになれた。また、普段インスタント食品で済ませている方から喜びの声をいただいた。
- ・ 開催中、偶然小さな地震が発生し、家で留守番をしていた近所の小学生の兄弟がこの会場に（人がいることに気付き）避難してきたことがあった。偶然ではあるが、不安の解消にもつながったかもしれない。

□実施するうえでの社会的課題について

- ・ 大勢の人が集い食事をするので、衛生上の問題と保健所の考えが子ども食堂運営の妨げとならないよう行政も支援して欲しいし、これから始めようとする団体に協力してあげてほしい。
- ・ 財政面の都合により、毎月1回行っていた事業であるが、年3～4回になってしまった。
- ・ 住民の皆さんの中には、特定の家庭（貧困家庭）のみを対象として支援を行った方が良いと考えている方、子どもの支援について興味関心が無い方や理解が薄い方もおられるので、今後も理解や協力を深めていく必要があると感じています。
- ・ 現在、地元自治体の協力で窓口チラシを置かせてもらっていますが、それしか協力ができないそうです。私たちには、支援を必要とする対象者につながる術がありません。やみくもに広報を行っても、支援対象外の方ばかりが集まってしまうので、今では、必要な方（現在把握できている方のみ）にのみ連絡しています。行政の側にもいろいろと事情はあるのですが、もう少し連携する方法があるように思えてなりません。
- ・ 一時的なブームにならないことを祈ります。
- ・ 少々規模が大きくなってしまいましたが、本来対象となる子どもたちに出会うためにも、地元密着した小さな居場所がたくさん出来て欲しいです。子どもたちは一日一日成長しています。一日も早く住民の理解をいただいて造り上げてください。調理器具や食器など随分集めましたので、いつでもお貸しできます。
- ・ 住民の理解と行政の広報による支援が必要。
- ・ 開催場所が見つからないこと。日曜日の昼間に「子ども食堂」やその他の活動を行おうと場所を探しているが、さまざまな制限で適当な場所がない。
- ・ 支援者の中にも「子どもに対する支援は良いが、親まで食べさせるのはいかなものか。しかもシングルマザーは自己責任だろう。」という人もおり、一般の理解はなかなか進んでいないと思う。啓蒙活動に力を入れていく事も課題だと思う。
- ・ 地域住民として、ご飯を皆で一緒に食べる場づくりは、特に大変なことではないので、「いろいろな立場や視点から、まず始めてみれば良い。」というような「子ども食堂」の多様性に対する理解が必要かと思う。
- ・ 住民の理解と行政の支援は課題ですが、一歩ずつ前進しているという実感はありますが、子ども食堂って何？と思われる方はまだまだ多いです。
- ・ 学校の協力が得にくいこと。行政や学校で把握しているご飯をあまり食べられない子や少ししんどい環境にいる子を連れてくる手段や伝える手段がない。また、地域の理解もあまり進んでいない。

□実施するうえでの運営面の課題について

- ・ ボランティアスタッフの確保が大事。
- ・ 主体となって実務を行っているのが、地域の子育て中のママ達なので、子どもがいる中で運営の準備（買い出し、ボランティアの管理など）を行うのは容易ではなく、最低限のことしかできていないと感じています。まだまだスタッフが足りていないので、広報もしなければいけません、充分にはできていない現状があり課題となっています。
- ・ 資金が足りません。現在は自分が経営するお店に来店していただく方からの寄付金で運営していますが、食材を買うのが精一杯という状況です。今後の活動拡充や情報発信を行うために必要な費用が賄えません。自分のお店ですので何とかやれていますが、スタッフが少ないことも課題です。
- ・ 参加者の増加にどう対応していくか考える必要がある。
- ・ スタッフが不足しているので、実施日以外にも、準備等にいろいろ動き回らなければならず、時間的にも資金的にも足りない。
- ・ 資金の調達、食材の調達、スタッフの確保、場所の確保、すべてが課題です。現在の月1回開催ではなく、もっと開催日数を増やし子どもを支援していきたいのですが、そのためにはすべてが足りません。
- ・ スタッフと食材の確保が課題である。また、資金の問題で事務所を持たないし、他の場所を借りることもできない。食材や食器などの保管場所もない。
- ・ 今のところ月1回の実施のため、スタッフの負担も小さく済んでいるが、今後各地区にて開催していく上では、スタッフの確保も課題となってくると思われる。

□「子ども食堂」以外に行っている活動

- ・ ひとり親家庭への学習支援
- ・ 無料学習支援、食糧支援（おてらおやつクラブ）
- ・ 地元自治体の補助金にて、職業体験イベントを開催
- ・ フードバンク活動、シングルマザー対象のお茶会とご飯会
- ・ 子ども食堂立ち上げコンサルティング
- ・ 障がい者の作業所
- ・ 学童保育所へのスタッフ派遣

【資料】三重県内 子ども食堂一覧表

三重県子育て支援課

番号	市町	名称	所在地	運営主体
1	津市	けいわっこカレー食堂	津市乙部33-5 (児童養護施設)みどり自由学園	けいわっこカレー食堂プロジェクト実行委員会
2	四日市市	こども0円食堂	四日市市北条町11-9 四日市市こども未来課分室テラス部分	NPO法人HiroSystem
3		羽津子供食堂&ゆう	四日市市大宮町14-9 サロンde志氏我野	羽津地区まちづくり推進協議会 子供食堂実行委員
4		四日市子ども食堂55	四日市市富州原町2-40 イオンモール四日市北 55カフェ店舗内	NPO法人三重はぐみサポート
5	伊勢市	ぱれっと食堂	伊勢市吹上2-11-46(明倫保育所横) グループホーム ぱれっと	NPO法人ステップワン
6		伊勢子ども食堂 キラキラ星	伊勢市朝熊町4383-333	ボランティア団体 健昌会(けんしょうかい)
7		伊勢こども&オジーオーバー食堂	伊勢市宇治浦田3-1-18	フードバンクいせ
8	松阪市	松阪メンフクロウの会	松阪市星合町662番地1	NPO法人松阪メンフクロウの会
9		東地区ふれあい広場	松阪市清生町533番地	東地区住民協議会
10	桑名市	太陽の家 桑名子ども食堂	桑名市常盤町51 桑名市総合福祉会館	NPO法人太陽の家
11		わくわくフレンズ くわな子ども食堂	桑名市大山田2-7-14	わくわくフレンズ(ボランティア組織)
12		善西寺 おてらこども食堂	桑名市西矢田町27-2 浄土宗総本願寺派 善西寺	善西寺おてらおやつクラブ
13	鈴鹿市	鈴鹿子ども食堂 りんごの家	鈴鹿市神戸地子町383-1 鈴鹿市社会福祉協議会	NPO法人shining
14	名張市	なばりこども食堂	名張市(*非公開)	みんなの居場所「こどもの隣」プロジェクト
15	熊野市	もちより食堂	熊野市有馬町 有馬第2公民館	福祉関係者による有志

注)実態調査に回答いただいた子ども食堂の一覧です。